甘寧と孫尚香

作＝gembu

「頼むぞ甘寧、何とかあのじゃじゃ馬を連れ戻してくれ。」

そう頼まれたのは2日ほど前の事だった。

腰に下げられた鈴が馬の歩みに合わせて音を立てる。

戦場で鍛え上げられた引き締まった上半身に、絡み付く様に彫られた龍の刺青。

額に巻かれた赤い鉢巻には鷲の羽根が飾られ、乾いた音を立てる人の拳大の金色の鈴が四つほど連ねられ、ぶら下がっている。鈴の甘寧と呼ばれる由縁だ。

「さて…どうっすっかな…。」

この男には珍しく悩んでいた。

気合と度胸で修羅場を潜り抜けて来た彼だが、今回の任務には頭を悩ませていた。

一時の戦略として敵国に嫁にいった太守　孫策の妹、孫尚香。

行くときには散々駄々をこね散らかしたくせに、今度は戻ってこない。

確かに彼女にしてみれば国の事情で「行け」だの、「戻れ」だの言われたのではたまったものではないのは良く分かる。だが、彼女が向こうにいたままでは、責めるに責められない。それどころか、もたもたしているうちに、力をつけた相手に責めこまれかねない。

一時は監禁され、帰るに帰れないのかとも思われたが、様子を見に、潜り込ませた兵士による

といたって自由気ままにしている、との事であった。
「連れ戻せ」と命じられた兵士が、護衛も連れず、森で狩りを楽しむ尚香に、近づき戻る様伝えたが、「いや」の一言。取り付く島どころか、何とか説得しようとした兵士を、ボコボコにする始末。頭を痛めた孫策が、最後に頼ったのが甘寧だったのだ。
「どうせ、あいつの身体はすでに、戦場で傷だらけだ。手荒に扱っても構わん。とにかく連れ戻してくれ。」
甘寧に命じた時点で、説得を諦めているのは彼にも良く分かった。説得する気が少しでも有るなら
彼に頼むはずがない。力づく、確かに甘寧の得意とする所だが、相手は太守の妹だ。
飲み屋の女を押し倒すのとはわけが違うのだ。眉間にめったに見せない皺をよせ、猛将、と呼ばれる男は馬に揺られていた。

馬の歩みに任せて丸三日。ようやく国境を越え、蜀の地へ入った。ここから馬を飛ばせば半日ほどで目的地へつけるはずだ。緩やかな上り坂を登りきりると、眼下には悠久の大河があった。夏の太陽が穏やかな大河を照らしている。
「へっ！　らしくねぇや。」
輝く大河は彼の迷いを立ち切ったようだ。

「いくぜっ！」
気合一閃、手綱を引くと馬は矢のように駆け出した。

「この辺で野宿といくか…。」
潜り込んだ兵士によると、尚香は毎朝散歩代わりに、森で狩りをすると言う。町が見える頃にはもう日が暮れていた。かと言って町へ入って宿を取るのは少々危険だった。目立つ格好は着替えればすむが、全身に彫られた刺青と、恵まれた体躯は隠すのが難しい。夏真っ盛りのこの時期に、あまり厚着をすればそれだけでも目立つ。危険を恐れる彼ではないが、しくじる訳にはいかない。道から、かなりそれた藪の中で夜を明かすことにした。

この時期の太陽は昇った瞬間から攻撃的な熱を発する。あたりはまだ薄暗いと言うのに、もう気温が上がり始めていた。
薄暗い部屋の中で、尚香は狩りの準備をしていた。身体にぴったりとした、見事な刺繍が施された絹の服は彼女のお気に入りだ。
上品な絹の光沢は、彼女のスラリとした足をさらに美しく見せていた。夏でも露出の少ない服を選ぶのは、身体の傷を隠したい女心なのかもしれない。全身を覆う赤い絹の上下には金糸の華が咲き誇っている。

「また狩りにゆくのか尚香。」
部屋に置かれた寝台から穏やかな男の声がした。
「もちろんよ。また説教をする気？」
「いや、もうなにも言うまい。だが、せめて護衛ぐらいは連れていってはくれぬか？」
「私が、うん、と言うとでも？」
「…そうだな、とにかく気を付けるのだぞ。」
男の声には諦めの色が濃い。
「もちろんよ。」
男は上半身を起こすと、矢筒と弓を担いだ一見華奢なシルエットが扉から出て行くのを見送った。
「フー…」
男は軽いため息をつきながらも、再び横になると浅い眠りについた。

獲物を探して森を歩く尚香は何かしらの気配を感じて足を止めた。
「動物じゃないわね・・・人・・・？」
息を殺して辺りを見まわす。そっと矢筒から矢を一本抜くと慎重に弓をつがえた。
「カラン…」

「鈴？」
尚香はつがえた矢を筒に戻した。
「何のつもり？　それとも私に狩られたいの？　甘寧？」
藪の中から男が現れる。
「あいかわずですなぁ、姫？」
「・・・なるほどね。どうやら、兄様は私を説得するのは諦めたみたいね？」
甘寧は肩をすくめて見せた。
「で、今度は力ずくってわけね。」
「これも命令なんでね。」
ゆっくりと近づいてくる。良く見れば甘寧は丸腰だった。
「丸腰とは随分舐められたものね。」
「流石に、姫様に刃を向けるわけには、いきませんでねぇ。」
そう言いながらも、甘寧は激しい気迫を放っていた。
「本気なのね。」
尚香はとっさに弓を剣の様に持ち替えた。弦が邪魔になるが贅沢は言っていられない。みすみす、
やられるのは性に会わない。

だが、相手の強さを尚香は、十分に知っていた。まともにやりあって、勝てる相手ではない。
「とんでもない獲物に出会っちゃたわね・・・」
命まで取られる心配は無かったが、負けたくは無かった。力では勝てない。
緊張が尚香の身体を包む。
巨躯が動いた。
「来る！」
そう思ったときには、すでに甘寧に、弓をもぎ取られ、左手は後に捻り上げられていた。
俊敏さでは勝っている、と思っていた尚香は慌てた。甘寧の動きに、まったくついていけなかった。
「この体で、こんなに素早いなんて…。」
何とか、抵抗しようとした尚香だったが、背後の甘寧に、右手も手首の所でガッチリと掴まれてしまっていた。まるで岩か何かに、捕まっているようだ、渾身の力で振り解こうとしているのに、びくともしない。
「あいたたた・・・やっぱりダメだったか・・・」
諦めた尚香がうつむくと、赤いブーツを履いた自分の足の両側に、背後の甘寧の足が見えた。
彼女が暴れる事を予想してか、ふんばれる様に肩幅よりやや広めに股を開いている様だ。

尚香の目が輝いた。
「・・・・・いけるっ！」
尚香は、再び、力いっぱい身体をゆすり、抵抗して見せた。
「おぉっと、意外と往生際がわるいな姫。」
甘寧は軽く膝を曲げ、腰を落とした。
その瞬間、甘寧は股間から脳天まで突き上げるような衝撃を感じた。

ゴッキ～ンッ！

尚香の硬い木で出来たブーツの踵が甘寧の股間にめり込んでいた。
「うおぉっ・・・おっ・・・おうっ・・・・っ！　ひっ、姫・・・・っ！？」
甘寧の股間から、男にしか解らない痛みが、波紋の様に全身に広がる。
たまらず尚香を掴んでいた手を離し、両手で股間を覆った。股は極端な内股に閉じられ、全身が痙攣のように小刻みに震えている。
素早く振り向いた尚香は、前のめりになった甘寧の顎のあたりを思いっきりブーツのつま先で蹴り上げた。美しい弧を描き、尖ったつま先は見事に顎を捕らえた。

ガッコ〜ン！

「がはぁっ！」

甘寧が後に仰け反る。咄嗟にバランスを取ろうと両手は大きく横に開かれ空を掻いた。がら空きの股間を尚香が見逃す筈がない。

持ち前のばねで、精一杯踏み込むみ、勢いをつけた膝で甘寧の股間を突き上げる。

ドスッ！！

尚香の膝は正確に甘寧の男の宝玉を捉えた。膝に挟まれた甘寧の睾丸が、袋のなかでひしゃげた。

「グァァァァッ！！　キンタマがぁぁぁぁッ！！」

叫びながら、1メートルほど後方に飛ばされた甘寧は、木の幹に背中を激しく打ちつけ、目の前が一瞬真っ暗になる。

尚香は素早く弓を拾い上げると、弦を外し、再び構えた。木によりかかった甘寧の、目の焦点が合っていないのを見ると、ゴルフのスイングの様に弓を振り上げ、甘寧の股間を狙った。振り下ろされた弓が、しなりながら鋭く空を切る。

スッパーンッ！！！

弓の先端は正確に獲物を捕らえていた。弓は甘寧の股間に食い込み、食い込んだ弓の上には、赤い布地に包まれた、小ぶりの卵ぐらいはあろうかと言う、彼の宝玉が二つ乗せられている。

「・・ぐがっ・・・あっ・・あぁぁ・・・おっ、おれの・・・たっ・・・玉・・・」

顎が外れるほどに、大きく開かれた口からは、かすれた呻き声と、涎が垂れていた。見開かれた目は血走り、黒目は、ほとんど上瞼の中へ隠れてしまっていた。両腕は、力なく垂れ下がり、猛将は木の幹に寄り掛かったまま、ズルズルと腰を地に落とした。

「・・うっ・・・あ・・・お・・おれ・・・の・・・きん・・・た・・・ま・・・が・・・・・・」

甘寧は意識を失った。

甘寧が目覚めると、目の前には旅支度をした尚香が立っていた。事情が飲み込めずに、ぽかんとしている甘寧のまだ痛む股間を、尚香は爪先で、踏みにじった。

「うおぉぉぉっ！　つっ、潰れる〜〜ッ！！」

「気が変わったの。望みどおり国に帰ってあげるわ、さっさと仕度しなさい。」

「わっ、わかりやしたっ！　わかりやしたからっ、あっ、足をっ！　足をどけてくだせぇっ！！」

「解れば良いのよ。さぁ、いくわよ。」
わけがわからない甘寧だったが、ここは素直に従う事にした。激しい股間の痛みと吐き気で、歩くのがやっとだった。

尚香を馬に乗せ、自分は馬を引こうとした甘寧だったが、
「なにしてんの！　もたもた歩いてたら今日中に呉につけないじゃない！　さっさと乗って飛ばしなさい！」
そう言うと尚香は馬の尻の方へ下がった。逆らう気力も無かった甘寧は命じられるまま馬にまたがり、そして、悲鳴を上げた。
腫れ上がり始めた彼の睾丸が、座った拍子に、馬の鞍にぶつかったのだ。咄嗟に腰を浮かせた甘寧の尻を尚香が叩いた。
「ちょっと、姫の顔の前に自分の尻を持ってくるとは良い度胸ね！」
「しかし、キンタマが・・・」
甘寧は情けない声で言った。
「ふん、いいわ、そのまま馬を走らせなさい。その代わり、それなりの罰を受けてもらうわよ。」
「へっ？」
尚香は、目の前の甘寧の尻の下へ、両手をさしこみ、それぞれの掌に、甘寧の睾丸を一つずつ

握り締めた。
「はっ、はひっ！？ひっ、姫ぇっ！！」
割と女らしいその手で、グリグリと甘寧の宝玉を揉みしだき始めた。
「さぁ！　やめて欲しければ、急ぎなさい！　甘寧！　国境を越えたらやめてあげるわ。越えるまでは、たっぷり遊ばせてもらうわよ！」
「ひぃぃぃっ！」
甘寧は慌てて馬を走らせた。だが、急げば急ぐほど、馬は揺れ、その度に、尚香にガッチリと握られた彼の睾丸は、上下左右に引っ張られた。尚香は、揉み上げる力を緩めない。
「はひっ！！あひぃっ・・・！！」
甘寧の情けない喘ぎ声と共に、馬は蜀の地を呉に向かって疾走していた。
男である事を誇りに思ってきた甘寧だが、今日はじめて自分が男である事を恨み、己の対になった宝玉を呪った。だが、潰されたくは無い。死ぬまでは男でいたかった。涙と鼻水を垂らしながら、必死に馬の腹を蹴る。
「いっそ、殺せ・・・」
甘寧は思った。

甘寧の睾丸を弄びながら、尚香は甘寧の尻にそっと呟いた。

「ふふふ、急がないと・・・あなたの大事な物、潰しちゃうかも・・・・・。」

彼女の目が怪しく輝く。

「兄様・・・、ただじゃおかないんだから。兄様だからって、手加減はしないわよ・・・・大丈夫、お世継ぎ作れなくなったら、私が生んであげるから・・・うふふふ・・・。」

とりあえず　終。